

短篇小説

秋

堀内新泉

昨日に變る、わが身の上、この世のことは、何
一ツとして、當になる事は無い、と、折ふしは、
思はぬでもないけれど、それは私の心得違ひ、成
程、成程、夫は天死なされたなれど、今茲十一の
忠磨といふ、愛らしい男の兒を頭に立て、末に、
二人の娘もあつた。

假令何程の、財産を遺して逝つて下さつた所で
こんな愛らしい、わすれ形見を置いて逝つて下さ
らなかつたならば、彼程、私を愛して居て下さつ
た、ア、片時も忘れられぬ、戀しい良人の俤を
何うして忍ぶことが出来まじやう。

清水家の、まだ、若い未亡人は、今日の、切な
い境涯の中にも、何時も、斯う思ひかへて、みづ
から慰めるのであつた。

けれども、清水工學士は、事業中途にして、圖

らす無常の風に誘はれたので、跡に、まだ、若干
の財産をも遺し得ず、わが温順なる妻に對する遺
産としては、たゞ、三人の幼兒を遺して行つたば
かりであつた。

前にも云つたやうに、未亡人は、精神的に何等
の愛も情もない金よりは、夫の生きた寫真とも見
るべき、此方の可愛、しかも幾何と價値の附し難
い、遺産の方を嘉ぶのではあるが、今日の生活
上の骨の折方は、櫻に嵐と云はうか、牡丹の若芽
に石と云はうか、實に、酷い状態である。

亡夫の兄弟は、三人あつて、皆、可なりの生活
を營つて居る。それが、幾何づか補助するかと
云へば、場合に依つてはせぬでもないが、三人と
もに、一度も、快くしてくれれたことはない。

古家の破れかゝる時は、何處も一度に痛んで來
るやうに、人の運命に、血が通はなく成つて來る
時は、何方に向いて見ても、冷い風が吹いて居る。

忽然に、未亡人は、近頃いよく、財政に必迫し
た所から、此家も、今は、兄夫婦の代に成つて居
る、わが生家に歸つて、身の振方に就き、僅に、

口を切りかけると、向ふは、はや、點頭いて、兄なる人の曰くが酷い。

何うせ、お前が、晩かれ、早かれ、そんな事を云つて來るだらうと思つたが、知つての通り、おれが、今日の境涯は、他人の女房子を食はせる所の話でない、わが妻子でさへ重荷を敵はぬ。この節一文の金もなしに、女子の細腕一本で、三人の兒を育て、行かうなどは、實に、飛んだ、了簡違ひだ。なア！世は出來るやうに遣つて行かなければ仕方がない。これは、お前に、今夜、始めて云つて聞かせる事では無いぞ！清水が死んだ當座に、スグ最ら先を見越して、おれが、ちやアんと云つたことだが、今日、無財産の身で、三人の兒を育て、行かうと云ふには、腕に力瘤のある男でさへ樂な仕事でない、況んや、女子の細腕で、何うして、やつて、行けるものかい、考へて見るが宜い！そんな無鐵砲な、空拳で、割れもせぬ岩を叩くやうなことをするよりか、關アこたア無い、清水に兄弟が、三人あるのを幸ひにさ、一人づゝ、兒を放りつけて、明日にも早々と歸つて來い！か

前一人の軽い身になれば、まアだ、年齢は若いしかれが、何んなにでも骨折つて、身の振方を附けてやる！ねエ、お牧、左様ぢやないか。

嫂も膝を前め、

『お濱さん、ほんとに、それが一番ですよ』

忍ぶ力に強い婦人は、泣きもせず、怒りもせず心の底に、兄夫婦の無情を泣いて、顔も言語も騒がせず。

『何うも、いろく有難う存じます！いづれ篇と考へまして、また、御相談に参ります』

二、

月下に思案の女足、頓に夫を亡つた、お濱は、とぼく歩いて居たが、ア、家には小供三人きり、と、おもひ浮ぶや、今更らしく、足を早めて歸つて見ると、三人ながら待飽いて、二人は、月の疊に眠り、今茲十一の忠實は、小さい欠伸をして居つた。

「忠さん歸りましたよ」

聲、聞きつけて、振り返り、

「ア、母さん！」

「淋しかつたでせうね。何方もお見えなさらないのか？」

「誰も来なかつたの」

「オヤ、秋さんも、玉さんも、こんな所にお

寝さして」

「今、二人とも、寝ちやつたの」

「スグ、歸らうと思つたけれどね」

「母さん、モウ、僕も眠い！」

「はあ、今、お床を延べてあげますよ」

「母さんが居ない、母さんが居ないツて、玉ちゃん

が泣いて困つたの」

母は、床を延べながら、

「さうでしたらうね、切めて、玉ちゃん丈なりと

伴れて行きたかつたんですが、子供の大勢居るのは

嫌だと云つて、叔父さんがおきらいなさるもの

ですからぬ。

「母さん、叔父さんは、何故、僕達を、彼んなに

嫌がるの！」

「何故だと云ふこともありませぬがね」

「だつて、叔父さんの家にも、幸ちゃんやら、竹

ちちゃんやら、梅ちゃんやら、彼んなに、どつさり
小供が居らア！」

おつ母さんは、返事に困つた。

「さあ、忠さんや、お休み！」

「母さんは？」

「母さんも、今、スグにね！」

「母さん、お先に！」

「はあ、お休み！」

今、床に、入つたかと思へば、モウ、すやく

と眠た様子。

庭には、虫の音が一杯。

「まあ、何んといふ、好いお月夜だらう」

お濱か、淋しい顔をして、凝然と仰いで居る月

は、満圓く満ちて居るが、我が身には、こゝ二月

ばかり前より、大事なものが一ツ欠けた。

又しても、おもひ出したか、ホロリと落涙

しながら、戸締をして、燈火を細め、凝然と立つ

た、寝巻姿のやつれ方！寝冷えさせじと二人によく

被せ、一人は抱いて、一度は床に入つたが、片腕

ついて身を起し、可愛寐顔を一ツツ、見ては、

また、おもひ換へ、
『だが、まあ、斯うして三人も小供があるから！』
と楽しい未来を、脳に描いて、母は、淋しく、微笑した。

三、
未亡人の两眼は、今朝、重さうに膨れて居る。
それも、その筈、昨夜は、一目も寝なかつた。

今朝も、思案に沈み勝、やツとの思ひで、御飯を炊き、お膳を拵へるのを待つて、三人は、何時もの席に座つたが、二人は、まだ、不器用な握り箸、可愛口して、食べるのを、此方で、凝然と見て居たが、『ア、不憫に何にも知らぬ！』とおもへば、涙、グツと、胸を衝き、おもはず、ワアと泣き出して、兩手に、顔を隠す間も無く、指の間から、スタ〜と、水晶の球のやうな、涙が、膝に落つるのであつた。

忠膺が、箸の手を止め、
『母さん、何故、泣くの？何ふしたの？』
小供心に、心から案じ、駈寄つて、首に纏り、モウ泣きさうにして、肩から顔を覗き込めば、未

の二人の箸を投げ、一緒に前から抱きついた。母は、その儘抱きしめて、

『ア、泣きはしない！泣きはしない！まあ、モウ、皆な、御飯をお食べ！斯うして、お前達が居てくれるのに、母さんが泣くものか、』
ア、最う、季節は、確に、秋！この、まあ、朝風の身に沁むこと。

先頃の新聞に採食料として書いてあつた中次の二つは面白いから

馬鈴薯のコロッケー

馬鈴薯を茹で、つぶし、鹽と胡椒を入れて程よく丸め、パン粉を付けて、またかきまはしたる卵を付け、更にパン粉を付けて、胡麻油にてあげる

残り飯の菓子

残り飯に應じて、蕎麥がきを固くこしらへ、その中へ、冷飯を入れて能くかきまはして握り、鐵網のうへにて醬油の附け焼きとす、残り飯とは思はれず。